

# 隣り合う部屋 ——*Uncle Tom's Cabin*における「共感」の空間

石川まりあ

## 1. 共感という問題

Harriet Beecher Stowe の歴史的ベストセラー、*Uncle Tom's Cabin* (1852、以下『アンクル・トム』)において、最も分りやすいメッセージをひとことで抜き出すとするならば、それは「共感せよ」という要請になるだろう。たとえば最終章で「作者」として顔を出す語り手は、奴隷制度の罪と黒人の置かれた悲惨な状況に対する「共感」の義務について、読者に向けて熱弁をふるっている。

There is one thing that every individual can do, — they can see to it that *they feel right*. An atmosphere of sympathetic influence encircles every human being; . . . See, then, to your sympathies in this matter! Are they in harmony with the sympathies of Christ? Or are they swayed and perverted by the sophistries of worldly policy? (624)

たたみかけるような調子とともに、たった数行のなかで三度も反復される“sympathy”の語は、作品中、他者との深い通じ合い(“heartly sympathy” [150])や、芸術や道徳への感応力というかたちで、重要な場面にたびたび登場するものだ。事実、ストウが1850年の「逃亡奴隷法」制定にあたり“I will write something. I will if I live!”と叫んで筆をとったという逸話や、義憤こそが執筆の動機だったと述べる手紙(Hedrick 237)が示すとおり、この小説が作家の強い感情的な反応を読者と共有するために執筆され、それゆえに国内外から啓蒙的な影響力を認められたことはよく知られている。

ただし、ストウの「共感」のあり方を考えるうえで看過できないのは、この作品が、黒人奴隷への心理的な接近を熱心に呼びかけるいっぽうで、彼らと距離を取り、さらには排除するような動きをも内包していることだ。それが最も顕著なのは、主要な黒人登場人物たちがみなアフリカ植民に送り出されるという作品の結末であろう。深南部で虐殺されるトムの物語の裏に、混血のイライザ親子とジョージの逃亡劇を描くダブルプロットの末、隣国カナダで自由を獲得した黒人たちは最終的に新興国リベリアへと旅立ち、北米大陸からいわば「追放」されてしまうのである。当然ながら、この問題含みな結末は、共感あるいは感傷(sentiment)による感化力とあわせ、『アンクル・トム』

およびストウ批評の中心的な論点となってきた。とくに 1980 年代以降、フェミニズム批評により家庭小説における感傷の政治性が明らかになるにつれ、ストウの想定する共感が、「モノ」としかみなされていなかった黒人への親近感と同情を喚起するいっぽう、じつは人種的他者に対する排他的な作用とも共謀関係にあることが問題視されてきた。<sup>1</sup> それらの指摘から浮びあがるのは、この共感の物語が、奴隷制撤廃の機運をうながしつつも、他方では黒人をあくまでも白人の脅威にならないかたちで馴致し、結果的に解放奴隷を対等なアメリカ国民として社会に受容することを拒む、人種間の線引きの維持にもまた加担していたということだ。<sup>2</sup> つまり、黒人をめぐる共感と「追放」にみられる矛盾する態度は、共感という政治的道具にひそむ「他者」への暴力性のあらわれとしてしばしば説明されてきたのである。

たしかに、これらの批判はストウの「共感」の限界を的確に言いあてているだろう。しかし、ここであえて考えてみたいのは、『アンクル・トム』での共感が人を動かす力として前景化されていればこそ、逆に、その威力ゆえに使い手の企図を離れて影響力を発揮してしまうような、共感の「御しがたさ」だ。共感とは、ともすれば他者への度を過ぎた接近へと人を誘うために、異なる人種を近づけすぎるという（白人にとっての）「危険」をはらむ概念作用であり、「政治的道具」としては扱いづらいものでもあるはずだからだ。事実、これからみてゆくとおり、ストウは、読者に黒人への親しさを生み出すことが第一の課題だったはずのこの小説において、黒人奴隷をいかに白人読者と近い位置まで引き上げるかに苦心する裏で、その成功を恐れるかのように、どこまで両者を近づけるべきか、という「距離感」あるいは「許容範囲」のほうにも心を砕いているのである。これはたんに作家が内面化する分離主義的なイデオロギーのあらわれというだけでなく、むしろ、共感という感情の働きそれ自体に対する、魅了と恐怖のせめぎあいとも考えることができるのではないか。

このような観点から、本稿では、『アンクル・トム』の語りやプロットにみられる共感の発動と、異人種間の接近に対して白人が抱く不安との緊張関係を読みとき、「共感する側」が「される側」に主体性を脅かされるという逆方向の動きを明らかにすることで、ストウをめぐる批評的関心事の新たな側面に光をあてる。その際に手がかりとしたのは、ストウの空間表象の用い方である。ストウが執筆にあたって最大の目的としていた「共感」の喚起を、ひとまず読者と登場人物との間にどのような関係性を築くのかという問題として考えるならば、心理的距離感である「近さ／遠さ」のしくみを、作品中で描かれる物理的空間の性質にてらして再考してみるのは有効に思われるからだ。家庭小説らしく多くの場面が室内に置かれ、「小屋」(Cabin)を題名に冠したこの作品では、家や部屋といった建物や室内空間の描写が、作家が重視した相手との安全な距離を測りつつ共感を呼び起こすという試みと密接に結びついており、それゆえに、他者との「線引き」の失敗をもまた映し出すのである。

以下では、まず議論の前提を確認すべく、共感が「隣り合う部屋」“adjoining room”という空間的な隣接関係として想像されており、それがあくまでも他者との「壁一枚」

を隔てた限定的な関係をめざしていることをみていきたい。つぎに、そうした共感とは異質な相手に近づきすぎる危険と対であるがゆえに、しばしば不穏な色を帯び、空間的な境界線の侵犯としても描かれていることを論ずる。そして最後に、共感の果てに近づきすぎた他者を「追放」する動きが存在するいっぽうで、彼らが同じ空間の内側にひそかに棲みついてしまう可能性もまた暗示されていることを確認し、ストウが意図したはずの距離を越えた「共感」のあり方をみていこう。

## 2. “Adjoining Rooms” —— 「隣接」としての共感

先に紹介した最終章の「演説」のことばづかいかにも顕著なように、『アンクル・トム』の語り手は、たびたび情熱的な口調で読者に共感の発動をうながしている。物語前半、混血奴隷のイライザが幼い息子を抱いて夜道を逃亡するという非常に緊迫した描写のさなか、語り手は読者に熱く呼びかけはじめる。

If it were your Harry, mother, or your Willie, that was going to be torn from you by a brutal trader, tomorrow morning, —if you had seen the man, . . . and you had only from twelve o'clock till morning to make good your escape, —how fast could you walk? How many miles could you make in those few brief hours, with the darling at your bosom, —the little sleepy head on your shoulder, —the small, soft arms trustingly holding on to your neck? (105)

「あなた」“you(r)”を一段落に11回もくりだす呼びかけは、母性愛としての共通性に訴えて、白人読者の気持ちを一気にイライザの境遇へと近づけようとする。この感情的な語りかけは、ストウに限らず、18世紀以降のイギリスに始まる奴隷解放運動やそれを後押しした感傷小説の分野では基本的なモードであり、フレデリック・ダグラス (Frederick Douglass) などによるスレイブ・ナラティブもこれを踏襲している (Rai 71)。その背景にあるのは、当然ながら、動産=モノ扱いしかされない黒人の体験を、白人が共有しうるものとして並置するという挑戦の困難さである。その課題の大きさは、作品中にも、たとえば、黒人が自分と共通の感情を抱くかもしれないと想像することすら拒否するマリーの言動として描かれている (268)。<sup>3</sup>

この難問に対処するため、ストウは語りの技法だけではなく、物語の舞台となる空間の用いかたにも気を配っているようである。作品内の空間描写は非常に多く、それは、感情や物語が動く重要な場面でドアや窓の開閉や部屋の配置がたびたび言及されたり、新しい登場人物が登場するたびにその気質や振る舞いを屋敷や部屋の詳細な情景に託して説明がなされたりすることにもあらわれる。たとえば、イライザの妻/母としての貞淑で信仰深い理想的な女性像は、彼女の部屋の様子に表れており、南部と北部の暮らし

方や信念の違いは、ニューイングランド出身のミス・オフィーリアと南部貴族のセントクレア宅のあいだにみられる「キッチンの情景」の違いとして描かれ、読者の好意や嫌悪などの心情的、あるいは道徳的な判断を導くものとなっている。

そもそも物語のはじめから、「家」の問題が、黒人と白人の境遇を結び合わせる装置となっている点は注目しておいていい。自由を求めるイライザたちの北上と、惨殺へと近づくトム南下というストーリーの起点となるのは、奴隷主シェルビーの財政難だが、この借金は「担保」である家の喪失に直結しているからだ——“Haley has come into possession of a mortgage which, . . . will take everything before it” (84)。「家の事情」によりやむを得ない、というシェルビーの主張は、やがて売られていく当の黒人たちの口からも理解と納得とともに反復され、「奴隷制度 = 黒人の不幸 = 白人の不幸」という問題を共有する「運命共同体」として接近させようとする (“a bitter, bitter, most accursed thing! — a cursed to the master and a curse to the slave!” [84])。「家」は、白人と黒人のどちらにも共有の問題として読者の共感を喚起するための重要な媒介なのである。<sup>4</sup>

さらにここで重要なのは、空間描写は、たんに精神風土や人物にまつわる情報を提供するだけでなく、読者の心情的な動きをもセッティングしている点だ。黒人登場人物たちへの心理的な「近しさ」を生み出すうえで、語り手は、物理的空間の距離と肌の色のグラデーションを作るかのように、白人読者を段階的に黒人のそばへ誘い込もうとしている。それはまず、小説の重要な手続きである人物紹介の手順において、主人公であるはずのトムが、だいぶ後回しにされることに表れているだろう。冒頭、語り手は、シェルビーら白人特権階級から一足飛びで黒人のトムへと目を移すのではなく、その前に白人としても通る容貌を持つイライザ親子とその夫ジョージのエピソードを入れ（第2章、3章）、それから肌の濃さを深めるようにして、ようやく“our humble hero” (239)であるトムを物語空間に登場させている（第4章）。この順序は、人種的差異の度合いがもたらす語り手の心理的な距離感によるものだろう。語り手はイライザたちの白人とほぼ同等の「美しさ、魅力」と「才気」(54)は褒めそやすが、トムとクロウの夫婦については、「黒光りする顔」「羊毛のような髪」と定型的な外見描写によって、むしろ人種的な差異を強調し距離をとっているからだ。それにともない舞台空間もまた、客間からシェルビー夫人の部屋（第1章）、そしてイライザの使用人部屋（第3章）を經由し、最後にようやくトムのキャビンへ移動することで、主人の“higher circle” (77)から、副題が示す“lowly”の領域へと降りていく。こうして、空間的な「近さ」から「遠さ」、そして人種的な「白さ」から「黒さ」へと、白人読者を少しずつ黒人のそばへと連れていくのである。

この空間描写の手順がたんなる偶然でないことは、先にも触れたストウの手紙において、奴隷制への義憤という自身の強い感情的体験を、やはりある種のグラデーションのレトリックで語っていることからわかる。

I wrote what I did [*Uncle Tom's Cabin*] because as a woman, as a mother, I was oppressed and broken-hearted with the sorrows and injustice I saw, because as a Christian I felt the dishonor to Christianity—because as a lover of my country, I trembled at the coming day of wrath. (Hedrick 237)

ここでストウは、女性、母親、キリスト教徒、そして愛国者へ、みずからの属性を「私」から「公」へと次第に広げつつ、感情を表す語と構文の反復により、黒人への共感に根ざした作品の正当性を強調する。近さから遠さへという語りかたは、ストウが共感を説得的にお膳立てする際の基本的モードとして、物理的な空間描写にも適用されるのである。

この過程を経てようやくトムの小屋にたどりついたとき、その心理的近さが、“adjoining”という空間的な「隣接」関係として準備されていることに注意したい。数頁にわたってロマンティックな小屋と周辺的情景描写を始めるにあたり、語り手は、この粗末な住居が主人の屋敷“the house”に「隣接」しているのだ、と強調するのである——“The cabin of Uncle Tom was a small log building, close adjoining to ‘the house,’ as the negro par excellence designates his master’s dwelling (66)”。トムと主人との特別な信頼関係という「近しさ」は、建物の位置関係として提示される。そして、この「すぐ隣の」小屋で、シェルビー家の御曹司ジョージとの人種と階級を超えた心あたたまる交流が醸成される(69-79)。同様に、シェルビー夫人に愛され信頼されるイライザの部屋も、(厳密には隣ではないが)夫人の部屋と同じ階、すぐ近くに配置されている(87)。この作品において白人登場人物たちが、そして読者が一貫して要請されているのが、黒人への“sympathy”であることを思えば、語源的に“having a fellow feeling”(*OED Online*)を意味する「共感」が、すぐ隣に並置された空間として描かれるのはわかりやすい。

こうした接近の結果として、「隣り合う部屋」は章を追うにつれ、より明確に、激しい感情の動きによる心の接近や通じ合いを表すものとなる。イライザが逃亡中に匿われるバード上院議員夫妻の家では、ストウは「共感」の主題を一步進め、救いを求めてドアの前に立つ者に宿を与えるホスピタリティの義務、という行為のレベルへと踏み込んでいる。バード夫妻が交わす、逃亡奴隷法の社会規範の要請に従うのか、道徳的・宗教的な隣人愛の掟に従うのかという議論の直後、イライザが行き倒れのように運び込まれ、子を持つ母の愛に訴えて一家の心を動かすのである(“everyone around her was, in some way characteristic of themselves, showing signs of hearty sympathy” [150])。イライザが「子どもの喪失」という共通項を通じて、相手の深い共感(“hearty sympathy” [150])を喚起する瞬間は、つぎのように描写される。

“Ma’am,” she said, suddenly, “have you ever lost a child?”

The question was unexpected, and it was thrust on a new wound; for it



was only a month since a darling child of the family had been laid in the grave.

Mr. Bird turned around and walked into the window, and Mrs. Bird burst into tears; but, recovering her voice, she said,

“Why do you ask that? I have lost a little one.”

“Then you will feel for me. I have lost two, one after another, . . . (149)

ここでは、唐突で核心的なイライザの問いが、夫妻の心をまるで通路を穿つように描かれる。妻の涙腺がとつじょ開き、夫が外へと通ずる窓へ向き直るところから、共感という精神的な現象が、身体や空間の「開通」として現れていると考えてもいいたろう。

さらに、バード夫人が亡くした息子の大切な形見（服）をイライザに贈る際、夫妻の心の動きがドアや部屋の開閉として描かれるのは見逃せない。<sup>5</sup> 夫人が服を取りに子ども部屋に入っていく場面ではやはり、「隣り合う部屋」のイメージが用いられている。

His wife opened the little bed-room door adjoining her room and, taking the candle, set it down on the top of bureau there; then from a small recess she took a key, and put it thoughtfully in the lock of a drawer, and made a sudden pause . . . (153)

母と子どもとの近しさをも体現する、隣室＝子供部屋のドアの描写は、心を「開く」行為とも結びついており、さらに「鍵のかかった大切な引き出し」（153）が、夫人の悲しみに閉ざされた心の核へと分け入り、イライザへの愛情を引き出す過程の比喩になっている。そして、「開けることの苦悩」をめぐって読者に切々と訴える語り手の介入（“And oh! mother that reads this, has there never been in your house a drawer, or a closet, the opening of which has been to you like the opening again of a little grave?” [154]）を経て、ふたたび流れる夫人の涙とともに引き出しは開けられ、もう一人の「母親」であるイライザとの間で悲しみの共有がおこなわれる（“I give them to a mother more heart-broken and sorrowful than I am” [154]）。ここで、「隣り合う部屋」は、黒人と白人を共通項で結びつけ、最大のキリスト教的「隣人愛」を実践する、困難だが貴重な交流の表れとして暗示されているのである。

### 3. 「壁一枚」の侵犯と移動の不安

バード上院議員の家における、「隣り合う部屋」を介したイライザへの共感の描写は、『アンクル・トム』での共感の定義を考えるうえで大きな意味を持つ。ここでは共感の契機がパーラーとキッチンにおける「公／私」の空間的対立として描かれるが、その関係は、白人と黒人のあいだの区分をいかに規定するか、という問題ともつながっていく

からだ。バード家は公人の夫によって“the house of state” (142) たる「国家」の比喩でもあることが示唆されており、ここで「隣接」(adjoining) 的な共感の可能性は、国家レベルの問題ともなっていく。公的空間における法(逃亡奴隷法の遵守義務)と、プライベートな一人としての道徳/宗教的義務(助けを求める者に宿を与える)が夫婦間で論争となり、結果、私が公を凌駕する様子(145)は、空間的には、キッチンがパーラーに勝利するという public と domestic の綱引きという形で現れている。バード家の章はパーラーでの議論から始まるが、事態を決定する心の動き(イライザの訴え、夫妻の涙)は、パーラーではなくキッチンで起こる。ただし、心の決定はキッチンでも、正式にイライザを「地下鉄道」で逃がすため助力するという重大な合意がなされるのは、より公的なパーラーであることは見逃せない(151-53)。キッチンは道徳的で情緒的な力を発揮しものごとを実質上動かすが、「家/国家」としての公式見解はパーラーでなされるべきなのだ。

公と私の領域区分にセンシティブな態度が、読者の理解を得るための実際的な配慮なのだとしても、キッチンを共感の場としつつ、パーラーに決断を譲る一連の描写は、ことキャサリン・ビーチャー(Katharine Beecher)を姉にもち、家庭小説のジャンルで執筆したストウの小説に関しては、「隣り合う部屋」としての共感のあり方を考えるうえで示唆的に響く。当時の女性領域(domestic sphere)論者の筆頭であったキャサリンは、私的空間は公に準じる「帝国の主権」の場であり、男女/公私領域の区分を厳正に保持しつつ、女性の地位を向上させ男性に匹敵する力を持つべきだ、という「積極的公私二元論」とでも呼ぶべき論を展開していた(Beecher 27)。姉との共著ももつストウは、キャサリンとは思想的に多くを共有しており、奴隷解放を叫ぶいっぽうで、女性が公領域で活動することには反対の立場をとり、あくまで家庭という女性の領分で働くべきだと考えていたことが知られている。このことは、才覚をもちながらビジネスには口を挟まないシェルビー夫人や「普段は政治には口を出さない」バード夫人の慎ましさが讃えられていること、女主人としての家庭の監督を怠るマリーへの厳しい目線にも反映されているだろう。<sup>6</sup>

本論との関連で重要なのは、姉キャサリンの「区分を残しつつ両領域の意味を近づける」というアプローチが、妹ハリエットにおける「隣り合う部屋」としての共感、というイメージとつながってくることだ。すでに見てきたように、この空間的接近は、異なる存在をつなぐ肯定的な装置として、黒人に寄り添う共感の可能性を追求するものだった。しかし、考えてみれば、“adjoining”という表現が示唆するように、ここで想定されている共感とは、第一義的には、同じ部屋で空間を共有するのではなく、あくまでも壁一枚を隔てた、「付加」としての「隣」でもある。事実、作品中では、黒人登場人物との親しい交わりを演出するいっぽうで、セントクレアの発言「違うものは違う箱に入れておきたい」(“all I want is that different things be kept in different boxes.” [281])に凝縮されるように、親しさの中でも黒人と白人との間の(空間的、精神的)区分が保たれるべきだという点については、さまざまな観点から注意深く予防線が張ら

れている。たとえば、マリーは、人種を超えてトムと愛情を育む娘エヴァが黒人に対し「立ち位置を思い知らせることができていない」(“you must make ‘em know their place. Eva never does;” [265]) ことを嘆く。この視点は批判的に造形されたマリーのみに見られるわけではなく、物語の設定上も、白人が黒人に過剰に近づくことは批判されているように思われる。実際に、セントクレアが甘やかしたために自らの立場をわきまえなくなった奴隷アドルフは、主人の名前も住所も「盗用」するまでにいたり、その危険性が強調される(第18章)。また、トムを惨殺する悪辣な主人レグリーと手下の奴隷たちとの「親密さ」も、道徳的墮落のおぞましさの一例となっているのである(第32章)。

同様の意識は、この小説の語り手の態度、とくに読者に対する介入の二重性にも現れている。語り手は、読者と黒人登場人物らの隔たりを承知しているからこそ、感情的な「通路」として、人種を超えた類似点を強調し、「近さ」を訴えている。しかしその一方で、読者との間で「私たち」が白人であることを確認する、という振る舞いをつうじ、黒人との「遠さ」を演出する手続きもあるようだ。たとえば語り手は、トムの小屋での主人側と奴隷との親しい交流を描きながら、ジョージ坊ちゃんの白人的優位性を褒めそやす(“George, who was a bright boy, and well trained in religious things by his mother, finding himself an object of general admiration, threw in expositions of his own, from time to time, with a commendable seriousness and gravity, for he was admired by the young and blessed by the old;” [78-79])。また、どこにでも分け隔てなく現れ交流するエヴァも、この世ならぬ美德と美貌の強調によって、彼女が手を差し伸べるトムやトプシー、ブルーなどの黒人とは次元の異なる存在だという印象を与える。これらは、白人の優位によって黒人との間に一線が画されていることを間接的に示し、読者を安心させようとするにもみえる。自由の身でも道徳的、能力的に優れていても従順で、奴隷主たちへの好意と敬意を忘れない黒人登場人物たちの描き方は、両者の立場を侵犯せず人種的差異という「壁一枚」の区分を維持することで分離しつつ、いかに接近し「隣り合う」という問題を反映しているのである。<sup>7</sup>

しかし、この抑制のきいた共感のデザインに、あちこちで無理が生じてしまうのは必然というものだろう。どんなに注意していようとも、黒人を好意的に描き、親近感を高めれば高めるほど、両者の線引きは難しくなり、境界侵犯の危険性が高まってくるからだ。事実、たびたび描かれる「盗み聞き」や「洩れ聞き」は、空間的な「隣りあい」の結果として起こる、不穏な空間の接続を暗示していると考えていい。その最たる例は、秘密裏におこなわれる奴隷売買についてのやり取りが、イライザによって二度も聞かれてしまう場面であろう。もちろん感傷小説における盗み聞きは、物語を前進させつつ劇的な効果を生むためのお定まりの装置と言ってしまうもいいのだが、空間の近接を共感の契機とみる本稿にとって重要なのは、イライザが盗み聞きする場所が、シェルビー夫妻の寝室に“Communicating”しているクローゼットであるという点だ。



Communicating with their apartment was a large closet, opening by a door into the outer passage. . . . she [Eliza] had hidden herself there, and with her ear pressed close against the crack of the door, had lost not a word of the conversation. (86)

これは、隣接した空間的特徴が、意図せずして情報の共有や「意思疎通」がおこなわれる関係をも意味していることを示唆する。さらにこの後、やはりクローゼットで意図せず洩れ聞いた別の黒人奴隷によって、ディナーのダイニングルームまでもが盗み聞き可能な部屋であることが示され (93)、この家がじつはプライバシーの保たれない「筒抜け状態」なのが見えるのである。この場面は肯定的に描かれており、女主人の意図や気持ちを読んでヘイリーの邪魔立てをするサムとアンディ (99) や、人道的な夫人の本心を代弁し続けるイライザによって、シェルビー夫人と黒人奴隷たちがいわば「あ・うん」の関係にあることを強調するものだ。サムに言葉の裏の意味を読み取らせ、イライザの逃亡を手助けするよう命ずるシェルビー夫人との関係のように (99)、「盗み聞き」の問題は、人種や立場に隔てられながらも奴隷制度という共通の敵に立ち向かう、心の共鳴を意味するようにもみえる。<sup>8</sup>

しかし、隣接する部屋の壁一枚を隔てて秘密や本心が届く現象は、同時に、物理的あるいは社会的区分があっても、じつは肝心なことはどこかで通じて (しまつて) いるという恐ろしい状況をも示唆している。とくに、イライザとジョージ夫婦の旅のプロットは、つねにこうした白人と黒人との空間的な、ひいては心理的な分離と接続がせめぎ合う、微妙な緊張感のなかで描かれていると考えていい。空間を移動し、州境を越境し、さらには法律の規定の格子を透過して逃亡をつづけるイライザとジョージ、ハリーは、たしかに白人読者と黒人の感情的接点である「通路 passage」として機能する。しかしそのいっぽう、白人としても通る容貌をもつ「パッシング passing」として、「隣室」的な関係が必要とする一枚の壁 (違い) をすり抜けられる存在であるために、彼らは脅威ともなりうるのである。

これは、小説のスタート地点が異質な空間への二度の「闖入事件」であったことから明らかではないだろうか。冒頭、シェルビーとヘイリーの商談の場面では、公的空間である客間に、異質な存在である子ども、しかも奴隷の混血児ハリーが突然飛び込んでくる。子どもの美しさに目を留めたヘイリーの奴隷売買の餌食となり、それを追って入室する母親のイライザもまた、「商品」として狙われてしまう場面である (43)。売られずに済んだかもしれないハリーが商品化される事件は、この母子による異なる空間の唐突な混乱に対する「罰」のようでもあり、プロット上の要請とはいえ、この偶然の悲劇からは、共感のための異なる空間の接続が境界侵犯という危険とセットであることがわかる。だが複雑なことに、この危険性こそ、小説の最大の宛名人、「母親である読者のあなた」の共感を呼びさますために不可欠となる。母親ならわかるだろう、と白人読者と奴隷とを感情的に結びつける一貫した語り方は、イライザ親子の空間の悲劇によっ

てこそ可能になっているからだ。ストウが関わっているのは、白人と黒人の境界線を残しながら（社会的優劣の関係を保ちながら）、どこまで両者を近づけ、隣れみや共感を喚起しうるか、を測る緊張に満ちたプロセスなのである。

この点、バード家でイライザが喚起する“*hearty sympathy*”は、突き詰めれば両者の接続と分離の微妙な均衡を脅かしてしまう力となりかねない。共感の発動が空間をたびたび「開く」動きとして、ある区分を取り払うような行為に重ねられているように、黒人と白人を「母」という共通項で同列に扱い、まったく同じ痛みを分かちもつように提示するからだ。<sup>9</sup> だとすれば、バード家での隣部屋をめぐる通じ合いのできごとの直後、それと表裏一体のようにして、イライザが一晩そこにとどまることすらできず、慌ただしく「地下鉄道」(Underground Railway)によって旅立たなくてはならないのは、偶然ではないのだろう。その際に興味深いのは、イライザが休息もそこそこに送り出されるのは、息子のハリーがどこからともなく頭を出してしまうからだ、というバード氏の言葉である——“if it's only the woman, she could lie quiet till it was over; but that little chap can't be kept still by a troop of horse and foot, I'll warrant me; he'll bring it all out, popping his head out of some window or door” (152)。びよこんと頭を出して全てを明るみに出してしまう、とじこめてかくまっておけないようなハリーの性質は、先に彼が公領域の客間に飛び込んでいった際の空間侵犯とも響きあい、イライザたちの危険な攪乱性に対する不安を暗示している。だからこそ、彼らは「隣国 *adjoining country*」であるカナダに送り出されなければならないのだろう。もちろんこれは時代的にもプロット上も、自由を求めるうえでの最良の選択ということになっている。しかし、これまで確認したように、隣接が「壁一枚」の隔たりの志向でもあった以上、黒人たちの「国外追放」は、あまりにも自由に区分を移動していく存在を国内に残すわけにはいかず、近づきながらも自らの空間をともにすることは拒否し、壁の向こうの「お隣」にいてほしいという、白人側の切実な不安の表出にみえてくるのである。

#### 4. ひそかに近しく棲まうもの

ここまで共感と空間の機能との関係に目を向けることで、ストウの「隣り合う部屋」のイメージが、黒人登場人物と白人との区分を意識する限定的な共感のありかたと、それを超えて侵犯する両者の結びつきへの不安をも反映していることをみてきた。その不安の解決方法は、北への移動と深南部への転売が対比される物語の果てに、自由を得たジョージが、リベリアこそが自分の国であり居場所なのだ、とアフリカでの民族自決を述べる力強い宣言（第43章）によって集約されているように見える。この構想は、前述のとおり、自由意志を持つキャラクターたちを「隣国」でも足りないとはばかりに、まとめて遠くアフリカまで「追放」という問題含みの結末である。

だが、本論の冒頭でも触れた、作家として直接読者へ語りかける最終章（“*Concluding*”

Remarks”)では、同様の主張を反復しながらも、ストウの口調はやや歯切れが悪いようにも聞こえる。ここで、ほぼストウと同一視しうると考えられる語り手は、黒人たちをアフリカに送る前に、アメリカ社会は彼らに対する償いを果たさなくてはならない、と言いつつのだ。

Does not every American Christian owe to the African race some effort at reparation for the wrongs that the American nation has brot upon them? . . . Do you say, “We don’t want them here; let them go to Africa”? . . . Let the churches of the North receive these poor sufferers in the spirit of Christ; receive them to the educating advantages of Christian republican society and schools, . . . and then assist them in their passage to those shores, . . . (625-26)

結局は植民へ送るにしても、少なくとも一定期間は自由人として北部社会に受容すべきだ、という主張には、黒人への「共感」の喚起を課題として連載を続けてきたストウのつきぬ迷いもまた、見て取れるのではないだろうか。いっぽうでは「壁一枚」を残すような寄り添いかたを模索しつつも、その共感が成功し、やがて奴隷制を撤廃できたとき、そのあとはどうなるのか、つまり、自由黒人をどこに住まわせるのかが、現実においては最も困難な問いとなるだろうことは、ストウ自身も認識していたはずだ。それを示すように、後半、南部貴族のセントクレアが北部人の「共感」の欺瞞性を非難し、奴隷制度撤廃を主張しながら本音では黒人をみな異国に追放したいのだろう、とミス・オフィーリアを問い詰め、彼女がしぶしぶ認める場面がある(273)。ストウの筋書きを一目自己言及的に断罪するかにみえるこのコメントは、しかし、物語上は、オフィーリアがトプシーをニューイングランドに連れ帰り、教育の機会を与えることで解決をみてしまう。最終的には宣教師としてアフリカに赴かせるとはいえ(第43章)、いったん北部を経由させることで、黒人を「家に迎え入れる」(353)義務は果たしたというわけである。

ただし、ここで重要だと思われるのは、ストウがいかに人種の分離主義に沿うような筋書きを用意しつつも、ジョージの口から、黒人には「アメリカ共和国に混じる権利」があるのだ、と語らせていることだ。

“ . . . our race have equal rights to mingle in the American republic . . . We *ought* to be free to meet and mingle, . . . We ought, in particular, to be allowed *here*. We have *more* than the rights of common men; — we have the claim of an injured race for reparation. But, then, *I do not want it*; I want a country, a nation, of my own.” (610)

とくに、最後の「賠償を要求する権利」という言葉は（直後でアメリカは真の「自国」ではないのだと否定されているとはいえ）、非常に重く響く。ここからは、本来なら黒人が自由人としてアメリカ社会の内部にとどまり、家を持ち、白人とともに住まうことが許されるべきなのではないか、という後ろめたさをストウが拭いきれなかったことが想像できるのである。<sup>10</sup>

こうした迷いが物語内にも表れているのだとすれば、それは、サイモン・レグリーの荒廃した屋敷における「幽霊」の挿話に見いだすことができるのではないだろうか。第42章は、当時めずらしくなかったゴシック・ロマンスの文法を用いているが、そのじつ、題名の「本物の幽霊話」(“An Authentic Ghost Story”)からも明らかなおと、幽霊が生きている人間であるという点で、ゴシック小説をパロディ化する、一風変わった設定となっている。<sup>11</sup> 性的搾取に苦しむ壮絶な人生を送ってきた混血奴隷キャシーは、少女エメリンとともに幽霊に扮してレグリーを脅し、間接的に死に至らしめる。自分やトムへの復讐を果たし悪役を罰する、という挿話だが、たんに奴隷制の罪への怨念を取り憑かせるなら、(トムに対しキリストの幻をいくども登場させているのだから)本物の幽霊、という設定でも可能だったはずなのに、なぜわざわざこのような設定が選ばれているのだろうか。<sup>12</sup>

屋敷からの解放と復讐という動機が前景化されているために見過ごされがちなのだが、ここで注目したいのは、キャシーたちが幽霊に扮するにあたり、たんに逃亡するのではなく、囚われている屋敷の内側に隠れて追っ手をやり過ごす、という展開である。<sup>13</sup> すぐにシェルビーの屋敷を飛び出して隠れ場所を転々とするイライザたちと違い、二人は実際の逃避行の前に外へ逃げ出したと見せかけてこっそり家に戻り、じつは一番近く、しかも屋敷の奥深くである屋根裏にとどまり、そこで数日間を暮らすのである(第39章)。自らの意思で抑圧的な家にとどまる選択は、支援者や追手によって去就のタイミングを計られ移動していくイライザやジョージの物語や、主人たちの都合で南へと転売されていくトム、そして性の慰みものとして複数の白人の間をたらい回しにされてきたキャシー自身の来歴に照らしても異質な動きである。

これを擬似的な「棲みつき」と考えてみるならば、主要な黒人たちを国外へ排出する本書において、「本物の幽霊」つまり生きている黒人奴隷に、一時的にでも、物理的な壁をすり抜ける存在として家に取り憑かせ、レグリーを支配するよう振舞わせたことの意味は非常に大きい。気づかれずに家の中に居座りながら、キャシーは「幽霊」の性格上、鍵をものともせずドアをすり抜け、自由に空間を行き来して、屋敷の主人たるレグリーを恐怖に陥れる。

It was whisperingly asserted that footsteps, in the dead of night, had been heard descending the garret stairs, and patrolling the house. In vain the doors of the upper entry had been locked; the ghost either carried a duplicate key in its pocket, or availed itself of a ghost's immemorial

privilege of coming through the keyhole, and promenaded as before, with a freedom that was alarming. (594)

奴隷であるキャシーが“freedom”を得るいっぽう、レグリーの側は空間に許可なく侵入されること、相手を隔てるためのドアの動きを自分の意思で制御できないことへの恐れに苛まれることになる。鍵と開くドアの描写は何度も繰り返され、レグリーが正気を失う決定打となったシーンでは、より明確に「部屋」が侵犯されている（“He was sure something was coming into his room. He knew the door was opening, . . . the door was open” [596]）。さらにここで、黒人と白人との距離感に対する懸念や抵抗を表す際に何度も登場する、「触れる」という問題が再登場しているのも見逃せないだろう。屋敷では、キャシーのやわらかく冷たい手（“the cold soft touch” [540]）や、「幽霊」の冷たい手（“a cold had touched his” [596]）がなんども伸びてきて、許可もなくレグリーに触れては彼の恐怖を喚起する。どんなに扉を閉ざし、壁を盾に分離しようとしても、キャシーは自由にそれを通過し、同じ部屋で主人を翻弄するのである。<sup>14</sup>

これらは典型的なゴシックの作法ではあるのだが、空間的配置や区分のあり方が黒人との関係性を反映してきた作品の最後で、「壁一枚」が意味をなさないようなこうした透過的な空間性が強調され、それを「復讐」の名のもとに肯定的に提示するという展開は、共感によって実現したいと考えた奴隷制廃止後の世界に対する、ストウ自身の不安と期待とを暗示していると考えてもいいのではないか。もちろん、残虐なレグリーの屋敷がキャシーにとって肯定的な「住み家」となりうるはずはない。そして一見、レグリーと同じ北部人であるはずの語り手は、その幽霊に自らも脅かされる可能性を念頭においてすらいないようにみえる（新田 175）。しかし、「幽霊」の仮装をつうじ、レグリーの罪悪感の源泉である母ばかりか、かつて彼が屋根裏に閉じ込めて殺した女奴隷（第 39 章）や、地下室で殺されたプルー（第 19 章）など、複数の犠牲者たちをその身に映しながら屋敷に棲みつくキャシーの振る舞いは、南部の奴隷制とそれを黙認してきた北部において、暴力がおこなわれてきたまさにその場に、解放された黒人が、抽象的な「怨念」や「罪」あるいは超自然的な「幽霊」ではなく、あくまでも「生身の人間」として触れ合うほど近くで加害者とともに住まうことになる、不穏な未来像を描いてしまったといえないだろうか。

最終的にキャシーたちは屋敷に永久にとり憑くことはせず、ほどなくカナダへ、そしてアフリカへと旅立つことで、解放を手に入れる設定になっている。そして物語としては最終章となる第 44 章は、シェルビー家の主となったジョージ坊ちゃんが奴隷を解放し、自由人の労働者として農園に受け入れることを宣言し、元奴隷たちが感涙にむせぶ感動のラストを迎える。しかし、この希望に満ちた場面で、ジョージも黒人たちもそして語り手も、これまで主人の家だった農園がこれからは黒人たちにとっても正当な「家」となるのだ、という見かたを口にするのではない。自分の家を持つことはないまま従順



に死んだトムの小屋を「聖地」として理想化するにとどめるのである（“Think of your freedom, every time you see UNCLE TOM’S CABIN” [617]）。意思を持って行動する主要な黒人たちをアフリカに送ってしまったいま、小説が最後に指さす先には、すぐ近くではあるが主人の「家」の「離れ」であり、いまやその住人すらも失った空っぽの「小屋」（a small log building, close adjoining to “the house” [66]）しかない。だが、そうしてもなお、黒人奴隷たちがやがて実際には送り出せない、消し去ることはできない対等な人間としてアメリカ全土に現れることを予見しているからこそ、「共感」の帰結である不安を内包しつつ、ストウはゴシックの枠組みを借りた勤善懲悪の逸話に託し、たった数日の偽装された振る舞いとはいえ、キャシーを屋敷に住まわせてしまったのではないだろうか。『アンクル・トム』の筋書きにより「解放」を希求しているのは、じつは罪の主体たるアメリカ国土であることを告発するように、キャシーは作品の表向きの結末に反し、「隣り合う部屋」の壁が作りだす空間的区分を無化してしまう自由な存在として、すぐ近くに、ひそかに棲みつくことになったのかもしれないのである。

\*

\*

『アンクル・トム』を空間表象という新たな切り口から読みとくことでみえてきたのは、白人読者の黒人に対する「共感」の喚起をみずからの使命としながらも、共感する側とされる側が互いに接近しようという、交感の双方向性に対するストウの敏感さである。作品中、人種や階級を越えて異質な存在に近づきすぎのような事態は、一見するとたくみに回避されている。しかし、そうした配慮やためらいこそが、共感がもたらす他者との関係性の制御しにくさを逆照射し、優位で安全な距離から黒人に同情を寄せるはずの語り手や読者の立ち位置を揺るがしているのである。

テキスト内部にみられる共感の複雑さは、作品が実際に世に出たとき、読者の感情移入の方向性をうまく誘導しきれなかったという事実からも見いだされるだろう。Weinstein が指摘するように、『アンクル・トム』は大きな反響を呼んで奴隷制撤廃を後押しした反面、作家の意図を完全に離れ、黒人よりも奴隷主たちへの同情のほうに加担し、奴隷制度の擁護に使われることすらあった。このためストウは自ら正確な意図の弁明と主張の正当性を論証すべく、*A Key to Uncle Tom’s Cabin* (1853) を執筆し、反撃しなくてはならなかった。その際、ストウはもはやコントロールがむずかしい情緒的な反応に頼るよりも、記録文書や判例などを引きながら奴隷制度の非道さを徹底的に論証しており、共感を呼び起こす自らの手法に修正をくわえているのである（Weinstein 66-94）。

このように、明確なプロパガンダ小説であればこそ、『アンクル・トム』をめぐって見え隠れする共感の危うさは、ストウが呼びかける“sympathy”の政治的道具としての威力よりも、それを操って人種間の関係性を規定することの困難のほうへと目を向けさせる。分離と接近を両立させようとしながらも、他者との間の「壁」を取り去る共感の作用に抗いきれず、「空間侵犯」や「とり憑き」といった不安な現象をつうじて白人と黒人の区分を融解してしまうとき、テキストは逆説的に「共感の力」を語るのである。

## 注

<sup>1</sup> この論点に先鞭をつけた Tompkins は、女性の社会的地位の向上をめざす戦略としてストウの感傷を比較的好意的に扱ったが、Barnes や Kaplan など、より近年の批評は、その暴力性のほうに力点を置いている。たとえば Barnes は、「類似性」(familiarity) に依拠するストウの共感が他者との差異を消し去ることで、異質なものを排除する政治的道具となっている点を指摘する (91-99)。また Kaplan は、地政学的観点から、女性の感化力を基盤とするストウのドメスティシティが、1850 年代頃に喧伝されたアメリカの領土拡大思想に寄与しつつ、国家の内部で異質な存在を選別し馴致する動的な機能を果たしていることを論じている (23-50)。なお、アフリカ植民の結末をめぐる批評史の変遷を簡潔に概観するものとして、たとえば Ryan を参照。また、Richard Wright や James Baldwin ら後年の黒人作家らによる本作への批判的な反応については、Warren などがわかりやすい。

<sup>2</sup> ストウが、聖職者であった父や弟らとともに一家をあげて黒人植民論の支持者だったことについては清水を参照。また物語の結末が、ストウ個人の人種差別的な「失敗」というよりも、アンテベラム期における「帝国」的な領土拡大思想と結びついている点については、Kaplan の他に、野口などが詳しい。

<sup>3</sup> これを意識するストウは、残虐さや惨めさに訴える「愛」の力だけでは北部人読者に黒人に対する共感を抱かせることはできないと考え、感傷小説のもう一つの要素、「怒れる神の天罰」との抱き合わせで説得を試みてもいる (Pelletier 269)。

<sup>4</sup> 家庭的なものと同質なものとの境界線を策定する家庭小説において、内-外を分ける物理的な敷居が重要なモチーフとなることは、すでに Kaplan が指摘している (43-44)。ただし本稿では、Kaplan が軽く示唆するのみだった、物理的空間性が共感の心理的な接近と分離を描くうえでいかに機能するのか、という点をより詳細に分析したい。

<sup>5</sup> 当初逃亡奴隷の扱いについて妻と対立していた政治家の夫が、「あの子の服があったよね」とためらいがちに告げ、イライザの苦境への共感を軸に夫婦が心を通じ合う瞬間も、やはり空間をつなぐ通路(ドア)のところで描かれている (153)。

<sup>6</sup> ビーチャーはとくに「育児と家事」を国家統治と同等の(その不可欠な基盤となる)「専門職」として称揚し、女性の教育にくわえ、家事技術を体系化した著書『家事要法』(*A Treatise on Domestic Economy*, 1841) の出版に力を注いだ。本作品でもこの影響は大きく、クロウやミス・オフィーリアの家事能力の称揚と対比されるセントクレア家の台所の救いがたい混沌が、女主人マリーの道徳的な価値すら疑問視させるほどの大事として描かれている。

<sup>7</sup> たとえばつぎのトムの描写には、そうした苦心が現れている——“There was something about his whole air self-respecting and dignified, yet united with a confiding and humble simplicity” (68)。

<sup>8</sup> これは、イライザの「侵犯」と盗み聞きを喜ぶ読者の心理的な作用にも通じているのかもしれない。最初に閉ざされた客間で男たちの間に交わされる密約を聞かされ、これからトムとイライザの息子ハリーの身に起こる秘密を抱え込んでしまった読者は、ヘイリーの企みが明るみに出てほしいと内心願うはずだからだ。

<sup>9</sup> ストウがバード夫妻のエピソードを通じて “heartly sympathy” と呼んでいるものは、現代的な観点からはむしろ “empathy” と呼びうるような、より直接的な接触であるようにも思

われる。Sympathy と empathy の違いについては、前者が “I feel pity for your pain” と相手の感情への理解を示すのに対し、後者は “I feel your pain” と表現されるような、より直接に相手の感情に移入する働きがあると説明される (Keen 4)。なお、empathy という語は初出が 1909 年 (OED Online) であるため、いずれにしても語彙としてストウが用い得たのは sympathy のみである。

<sup>10</sup> ストウは結末のアフリカ植民に対する抗議を受け、フレデリック・ダグラスにこの設定を後悔する旨を手紙に書き送っている (野口 196)。

<sup>11</sup> ゴシック的な幽霊屋敷が、ストウの幼少期の幽霊に対する恐怖を反映していること、また父や弟が説教に好んで用いたモチーフでもあったことは、Halttunen を参照。

<sup>12</sup> この点につき、たとえば新田は、出没する幽霊が生身の人間なのは現世的な行動力や社会改良を重視するストウの姿勢の表れとして、死の間に虐待者たちを許すトムや、リベリア植民とあわせ、「奴隷制も出没する幽霊も、きれいに悪魔払いされたアメリカ社会への指向性を示」(171) す側面があることを指摘する。

<sup>13</sup> 一番近いところに隠れるという戦略は、近所の宿屋に泊まって追っ手の裏をかくジョージとも共通している (第 11 章)。

<sup>14</sup> Gilbert & Guber は、同時代を生きた Emily Dickinson の代表作のひとつ、“One need not be a Chamber - to be Haunted” がこの箇所に対応して書かれたとして、両テキストの影響関係を論証する (624)。実際、部屋などの空間のイメージや無効化された鍵、ピストルなどの設定や語彙は非常に似かよっており、その説は当たっていると思われる。ただし、ストウがレグリーの罪悪感というモラルの問題に限定していたのに対し、Dickinson の場合は内面の自己と対面する恐ろしさや危険性をより発展的に追及している。

## 引用文献

- Barnes, Elizabeth. *States of Sympathy: Seduction and Democracy in the American Novel*. New York: Columbia UP, 1997.
- Beecher, Katharine. *A Treatise on Domestic Economy, for the Use of Young Ladies at Home, and at School*. Revised Edition. 1842. *From Domestic Economy to Home Economics: The Transformation of American Women's Lives 1830-1930*. 6 vols. Tokyo: Athena, 2008.
- Franklin, R. W., ed. *The Poems of Emily Dickinson*. 3 vols. Cambridge: Harvard UP, 1998.
- Gilbert, Sandra M. and Susan Gubar. *The Madwoman in the Attic: The Woman Writer and the Nineteenth-Century Literary Imagination*. New Haven: Yale UP, 1979.
- Halttunen, Karen. “Gothic Imagination and Social Reform: The Haunted Houses of Lyman Beecher, Henry Ward Beecher, and Harriet Beecher Stowe.” *New Essays on Uncle Tom's Cabin*, Ed. Eric J. Sundquist. New York: Cambridge UP, 1986, 107-34.
- Hedrick, Joan D. *Harriet Beecher Stowe: A Life*. Oxford: Oxford UP, 1995.
- Kaplan, Amy. *The Anarchy of Empire: In the Making of U.S. Culture*. Cambridge: Harvard UP, 2005.

- Keen, Suzanne. *Empathy and the Novel*. Oxford: Oxford UP, 2007.
- Pelletier, Kevin. "Uncle Tom's Cabin and Apocalyptic Sentimentalism." *Lit: Literature Interpretation Theory* 20.4 (2009): 266-87.
- Rai, A. *Rule of Sympathy: Sentiment, Race, and Power, 1750-1850*. New York: Palgrave Macmillan US, 2002.
- Ryan, Susan M. "Charity Begins at Home: Stowe's Antislavery Novels and the Forms of Benevolent Citizenship." *American Literature* 72.4 (2000): 751-82.
- Stowe, Harriet Beecher. *Uncle Tom's Cabin: Or, Life Among the Lowly*. New York: Penguin, 1981.
- Tompkins, Jane. *Sensational Designs: The Cultural Work of American Fiction 1790-1860*. Oxford: Oxford UP, 1985.
- Warren, Kenneth W. "The Afterlife of *Uncle Tom's Cabin*." *The Cambridge Companion to Harriet Beecher Stowe*. Ed. Cindy Weinstein. Cambridge: Cambridge UP, 2004, 219-34.
- Weinstein, Cindy. *Family, Kinship, and Sympathy in Nineteenth-Century American Literature*. Cambridge: Cambridge UP, 2004.
- 清水忠重「アンテベラム北部の黒人論」『神戸女学院大学論集』第46巻3号、2013、109-27頁。
- 新田啓子『アメリカ文学のカルトグラフィ——批評による認知地図の試み』研究社、2012。
- 野口啓子「『アンクル・トム的小屋』とスレイヴ・ナラティヴ——ストーリーの色分けされた黒人たち」『『アンクル・トム的小屋』を読む——反奴隷制小説の多様性と文化的衝撃』高野フミ編、彩流社、2007、191-214頁。